

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

経験を受け継ぐということ：
マダガスカル の 漁村 から

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2014-03-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 飯田, 卓 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5082

経験を受け継ぐということ

——マダガスカル漁村から

文 飯田卓

いいだ たく

文化資源研究センター准教授。専門は生態人類学。マダガスカルをおもなフィールドとして、漁村や山村の資源利用を観察し、技術や知識の維持・発展の問題に取り組んでいる。著書に『海を生きる技術と知識の民族誌——マダガスカル漁撈社会の生態人類学』（世界思想社 2008年）、『名瀬のまち いまむかし——絵地図から地籍図まで』（共著 南方新社 2012年）などがある。

この時代に生きるわれわれは、世代を超えて経験を受け継ぐことに、困難を感じはじめているのではない。すこし大げさかもしれないが、事態は深刻である。苦労話や成功談、それらをとおして得た教訓や処世術、仕事をこなすためのわざなど、かつて親から子へ伝えられていたさまざまな経験上の知恵は、現代では受け継がれにくくなっている。

受け継ぐことの動機が、そもそも希薄である。現代において、世代を超えて伝えるべきことが、どれほどあるというのだろう。高度成長を体験した世代とロスジェネ世代（失われた世代）とでは、人生設計が大きく異なる。上の世代は、円安と終身雇用の恩恵を受けてきたのであり、彼らの世代の人生訓は、これからの時代にもはや通用しない。親の体験談よりは、新刊のビジネス書やノウハウ本で得る知識のほうが、はるかに役だつだろう。

知識の普及という点でいえば、インターネットの発達も世のなかを大きく変えた。ネット上のブログやSNSは、世界じゅうのあらゆる場所について、おいしい店のレポートを掲載している。冠婚葬祭のマナーから、パソコンのトラブル対処にいたるまで、あらゆる難題を解決する糸口がネットにはあふれている。こうしてみると、かつては受け継がれなかったような体験が、近年では受け継がれているようにみえる。

しかし、受け継がれる体験の質は、極端に偏っている。このことには、いくら注意してもしすぎることはないだろう。本やインターネット、あるいは映像メディアで得られる情報というのは、すぐに理解し消化できるたぐいのものである。理解のために試行錯誤が必要なことがら、つまり長い時間をかけて習得することがらや、目や耳だけで処理できない身体感覚に根ざしたことがら、特定の場所と結びついた記憶などは、メディア経由は受け継ぎにくく、どうしても対面的な相互行為をとおして受け継

ぐ必要がある。しかし現代では、メディアをとおした学習や情報探索に時間が費やされており、「体で学ぶ」ことは否応なく後回しにされている。

ところでわたしは、親から子への対面的な継承がじゅうぶん意味をもつ社会において、フィールド研究をつみ重ねてきた。場所は、マダガスカル漁村である。その漁師にとって、漁という仕事はたんに主要な生計手段であるだけでなく、ヴェズという集団的なアイデンティティの拠りどころでもある。漁に関する経験は、おのずから親から子へと受け継がれる。では、それはどのように受け継がれるのか、そしてそのことは、メディアが極度に普及した現代日本社会でも学ぶに値することなのか。そうしたことを論じてみたい。

結論を先どりして言えば、彼らはかならずしも、親の経験をハードディスクにコピーするように受け継ぐわけではない。また、親からの学習だけを重視するのでもない。彼らの継承の特徴は、受け継いだことがらをあたらしいものと組みあわせて功利的に利用すること、そして、グループ内部に無数の継承回路を張りめぐらせて継承を複線化していることである。

このような議論をする理由のひとつは、文化人類学という学問が、受け継ぐということに関して特別な視座を確保してきたと思うからである。もともとこの学問は、第二の自然としての文化が、好むと好まざるとにかかわらず受け継がれることに着目していた。もちろん、現実には、それだけで説明できるほど単純ではない。いわゆる本質主義への懐疑が大きくなってからは、伝統の創造的側面や、時代に対する柔軟な姿勢を強調することが多くなった。しかしそれでも、受け継ぐことへの関心は薄らいだわけではない。受け継ぐことを冷徹に見据えられるようになったことは、むしろ理論的前進であろう。

文化人類学は、民俗学や教育学などとならんで、この



ヴェズのカヌー。漁を終えた若者たちが競争に興じている。1995 年撮影。

問題を先導できる立場にある。「継承学」というものが成りたつとすれ

ば、文化人類学者はまちがいなくその中核を占めることになる。そうした予期をふまえて、この小文を綴ってみた。

ヴェズ漁民

ヴェズと呼ばれる人びとは、マダガスカル南西部一帯の海岸に広く居住する。けっして漁だけを生業とするのではないが、漁こそがヴェズの本来の仕事であると、多くのヴェズたちが認めている。ヴェズ以外の周囲の人びとも、同じように考える傾向にある。漁がアイデンティティの拠りどころとなっているのである。

このように説明すると、漁の仕事につきたがらない若者はいないのかという質問が、きまって返ってくる。もちろんそのような若者もいるが、わずかといいてよい。少なくともこの 40 年ほどのあいだは、漁の景気がよく、ほかの仕事を目指す若者は少なかった。農業では収穫の季節がかぎられているし、都市でも働き口がそう多いわけではない。海でなら、それほど大きな資本がなくとも、少しずつ働いて毎日収入を得ることができる。このため、都市で育った若者はともかく、漁村で育った若者は、幼い頃からなじんだ海の仕事を選ぶことが多かったのである。このような理由から、ヴェズの若者たちは、上の世代から漁の経験を受け継ぐ動機を、じゅうぶんにもっている。

しかし漁師たちは、親の世代と同じ漁を十年一日のごとくくり返しているわけではない。彼らはむしろ、進取の気性に富んでおり、たえずあたらしい漁法を磨きつけているといってよい。こうしたなかで、彼らは、何を継承しているといえるのか。そのことをさしあたって考

えてみたい。

ヴェズ漁師が開発してきたさまざまな漁につい

ては、すでに別所で報告したが（飯田 2008, 2010）、要点を述べておこう。ここ半世紀ほどの新漁法のなかで、もっとも大きな発明は、サメ刺網漁である。漁のスケールでみても大きい、漁家の家計をうるおしたという点でも、その意義は大きい。1990 年前後から、ヴェズ漁師たちは、網目の大きな刺網で大きなサメを絡めとるようになった。その鰭（フカヒレ）を乾かせば、香港やシンガポールで高い値段がつく。わたしが調べた例では、わずか 6 週間の操業で、1 年間の主食購入費に匹敵する水揚げがあった（飯田 2001）。

この漁法が発明されるまで、ヴェズ漁師たちは、サメだけをねらって漁をおこなうことはなかった。まだ村の鍛冶屋が釣針を作っていたころ、大きな釣針で釣りをしたとき、意図せずにサメがかかるていどだった。しかし、こうした上の世代の経験から、サメ刺網をする漁師たちは、サメの扱い方を学んでいる。サメ網にかかったサメがまだ生きているとき、カヌーを漕ぐ櫂（パドル）をその口に入れて咬みつけないようにすることなどは、その好例である。

上の世代の経験は、サメの習性に関する知識としても受け継がれている。サメがよく通る場所や時刻、深さなどをよく知らなければ、この漁は成りたたなかっただろう。また、漁具製作の段階では、小さな刺網を作る技法も応用されている。小さな刺網とサメ刺網の大きなちがいは、その素材だけといってもよい。小さな刺網で使うナイロン糸の代わりに、サメ刺網では、ナイロンロープをほぐ



サメ刺網漁の準備。1996 年撮影。

した細引きや、束ねた古い漁網を使う。しかし、編み針を使ってそれらを編む方法は、両者のあいだで大差ない。

操船と木工

サメ刺網の例では、サメの習性やそのとり扱い、刺網の作りかたに関して、世代を超えた経験の継承がみられた。ただし、これらのことがらは、どちらかといえばひと言で語れる経験であり、本に書いてしまえるようなノウハウとみれなくもない。だがそれ以外にも、時間をかけた継承、いいかえれば、受け継ぐ側が継承のためにある程度のコストをはらう場合もある。

そのひとつは、カヌー操縦術の継承である。ヴェズのカヌーは、船体に平行した浮材を右側にもつシングル・アウトリガー式カヌーで、櫂で漕いで進むほか、帆をかけて走らせることも少なくない（飯田 1998, 2001, 2012）。帆走のうえで必要となる技術は、風に応じた帆のかけかた、舵のとりかた、風が強いとき浮材の上に立って船体のバランスをとるやりかたなど、見よう見まねで習得できないものばかりである。また、船が転覆したさいの対処法や、浅い水路を座礁せず進む工夫、風に逆らって間切るときに進路のとりかたなども、航海経験を重ねていないと、話だけ聞いてもわからない。

こうした大小さまざまな要素から成る操船術の体系は、一部地域の漁師たちが1990年代に漁場を拡大するさい、重要な役割をはたした。サメの多い深水域を採しだすために、彼らはカヌーを帆走させ、来たこともない村々を訪ねて出漁先にたどり着いたのである。わたしの知り合いの漁師たちは、2009年以降、村から500キロメートル離れたところまで出漁するようになっている。



カヌーの舵をとる少年。櫂1本で風の力を制御するには習熟が必要。2010年撮影。

もうひとつ、操船術とともに漁法開発に貢献した技術体系として、木材加工に関する技術体系があげられる。ヴェズ漁師たちは、カヌーを自作するために、あるいは刺突具の柄や漁網の浮材など漁具を自作するために、適切な材を選んで斧一丁で加工することに慣れてきた。小学生くらいの子でもですら、おとなたちの木工を見て学び、自分の玩具を自作してしまうほどである。

1990年代以降、彼らが自作するようになった木製漁具として、イカ用の疑似針と銆銃がある。イカはもともと市場価値が低かったのだが、冷凍輸送の普及によって価格が上がり上がった。仲買人たちはこのとき、外国製のイカ用疑似針を漁師たちに配ったのだが、専用のリールや釣竿がなかったためにうまく泳がない。このため漁師たちは、疑似針のプラスチック製本体から針の部分（金属部分）だけを取り外し、自作した木製部品につけ替えたのである。このことにより、櫂による漕艇と素手による糸の回収を組み合わせた、ヴェズ独特のイカ漁が可能となった。

銆銃のアイデアは、ダイビングに来るヨーロッパ人観光客から学んだものである。カーボン樹脂製と思われる彼らの銆銃を見て、ヴェズ漁師たちは、木製本体をもつ銆銃を発明してしまった。本体以外の部品には、ゴムタイヤやスプーンの柄、自転車のスポークなど、さまざま

な素材が用いられている。このおかげで、素潜り漁のときに魚を射とめる確率が向上した。生活を大きく変えたというほどではないが、とくに体力があつて素潜り漁を好む若者たちにとって、いまやなくてはならないアイテムである。

すぐに役立つものの集積

このようにヴェズ漁民は、世代を超えて、漁をするための技法を継承してきたといえる。しかしそのいっぽうで、同時代的な技術や知識の活用にも注目する必要がある。先行世代と同時代、両方に学びつつ漁を成りたせることが、ヴェズの漁撈の本領だったといえる。そのことは、受け継ぐことを現代的課題として考えたとき、どのような含意をもっているのだろうか。

第1にいえるのは、ヴェズ漁師たちが古いものをそのまま受け継いでいるのではなく、あたらしいものと組みあわせるための素材として利用していることである。その態度は、ありあわせの道具と素材でおこなうブリコラージュ（日曜大工）に通じるものがある。もっとも、銆銃を作るのにスプーンや傘まで動員することは、新旧の組みあわせにとどまらず、複数素材を用いたブリコラージュの典型といえる。

もうひとつ例をあげるなら、漁師たちは3年ほど前から、小型LEDライトに避妊用のコンドームをかぶせて水中に持ちこみ、夜間に素潜り漁をおこなって大きな漁獲をあげるようになった。本来の用途と異なった場面で道具を役立てるのは、ブリコラージュの基本である。



カヌー作り。ドリルや鑿（のみ）などの道具も最近が多いが、多くの工程は斧1丁でおこなう。2011年撮影。

ブリコラージュという用語を学術用語にまで高めたC.レヴィ＝ストロースの一節を、あらためて読みなおしてみよう。

計画ができると彼（プリコール：引用者注）ははりきるが、そこで彼がまずやることは後向きの行為である。いままでに集めてもっている道具と材料の全体をふりかえってみて、何があるかをすべて調べ上げ、もしくは調べなおさなければならない。そのつぎには、とりわけ大切なことなのだが、道具材料と一種の対話を交わし、いま与えられている問題に対してこれらの資材が出しうる可能な解答をすべて並べ出してみる。しかるのちその中から採用すべきものを選ぶのである。彼の「宝庫」を構成する雑多なものをすべてに尋ねて、それぞれが何の「記号」となりうるかをつかむ。（レヴィ＝ストロース 1976: 24）

これを読むと、ブリコラージュをおこなうための前提として、すぐに役立つものの集積が欠かせないことがわかる。もちろん、ヴェズの場合もそうである。すぐに役立つものも「宝庫」のなかにひとまず収め、ブリコラージュの必要に迫られると、そのなかから素材を探し出すというわけだ。

しかし現代日本ではどうだろうか。すぐに役立つようにみえることがらは、無駄を省くというかけ声のもとで、あたかも財政赤字と同じように削減される。とくに「改革派」と呼ばれる政治家が、自分の見とおしに関係ないものをひっくるめて無駄とみなし、大鉦でもって省いていくのが流行のようだ。じっさいに無駄は少なくなったかもしれないが、芽が出るかもしれない多くの事



銆銃作りに興じる少年たち。2010年撮影。



素潜り漁に使うフィン（足ヒレ）の修理。
2010年撮影。

業も、結果が出る前に中断された。「役に立つかどうかはわからない」などと言おうものなら、どんな事業でも廃止の目にあう。

政治の場だけにかぎらない。身のまわりの古いものを積極的に処分するという考えかたは、「超」整理法や断捨離といったかたちで、われわれの日常生活にも深く浸透している。次から次に登場する新製品（新刊や新譜も）につき合うためには、新陳代謝が必要だというわけだ。自分の過去ですら惜しげもなく捨ててしまうくらいだから、上の世代の思いなどは、受け継がれるはずがないだろう。

こうした状況において、受け継いだものがすべてブライコラージュに活用され、将来的な創造の源泉になるという認識は重要だろう。もちろん、認識だけでは空論に終わってしまう。受け継ぐことが積極的な意味をもつということを、事例とともに示していくことが、それを現代的に活かすうえでは必要だろう。

グループによる継承

ではヴェズ漁民は、受け継ぐべきことがらと許容量とのアンバランスを、どのように解決しているのだろうか。じつはこのことは、「受け継ぐ」ことを現代的に活かすうえで、考慮すべき第2の点である。ヴェズ漁民は、技術体系や価値観を、先行世代から直接継承しているわけではない。もちろんそのようなケースも少なくないのだが、多くの場合は同世代から学ぶという回路も併用して、結果的に先行世代からの継承をはたしている。家業である漁師の仕事ですら、彼らは親だけから学ぶのではなく、経験をもつ人なら誰からでも、どの世代からも学ぶ。

これは言い換えれば、個人でなくグループが継承をは

たしているということである。現代社会では、グループで継承しているような場合でも、実質的に個人が継承している場合がある。たとえば会社のノウハウであれば、問題の性質ごとに管轄が細かく決まっていて、部局内部ではさらに担当者がかぎられていることが多い。このような場合に、担当者が交替すれば、会社のノウハウが一気に失われることだって起こりうるのである。このことは、2007年問題として一時期大きくとり上げられたが、問題が解消したわけではなく、熟練者が退職して何年もしてから影響があらわれてくる場合もあろう。このような事態を避けるため、企業側はさまざまな努力を試みているが、現代日本の社会では、受け継ぐことの責任が個人に集中しすぎているといえる。

継承をグループ単位でおこなうヴェズ方式では、誰が誰からなにを継承するのか、担当があらかじめ決まっていない。だから、個人への負担がかからないが、いっばうでは責任をもって継承に参加する者がいなくなり、不備がいろいろ生じてこよう。具体的には、特定の人の経験をもれなく受け継ぎたいような場合、継承者を自任する者は多いかもしれないが、分担が曖昧になるために継承が断片的になってしまう。また、継承されることがらのリストを作るのでなければ、継承から漏れてしまうことがらも多くなろう。どれだけ厳密な継承がおこなわれるかは、受け継ぐ側の事情や熱意など、偶然的な要素にも左右される。こう考えると、グループによる継承は、決してオールマイティな解決策ではないことがわかる。

しかし、不特定多数の人たちが漠然と共有することがらを受け継ぐうえでは、ヴェズの継承様式はむしろ有効である。当初は継承に関心をもたなかった個人も、すでに継承に関与している者の力を借りれば、継承に参加することができるからである。継承者がグループに複数いるのであれば、ひとつのラインの継承がうまくいか

なくとも、他のラインでの成功を期待できる。継承すべきことがらをグループ内に分散してプールし、グループの成員全員が必要に応じてアクセスできるようにしておくというのが、この方式の利点である。

先に述べたように、この方式はオールマイティではない。受け継がれるものの性格やグループの属性、どれだけ厳密な継承が要求されるかなど、条件によっては、適用する前からうまくいかないことが明白なことからある。しかし、継承のための回路を複線化するというアイデア自体は、フォーマルな継承が必要な場合にもかなりのでいど応用可能だろう。たとえば、ノウハウのセンターのようなものを、部局をまたぐかたちで作っておく。自治体史や社史の編纂室というものは、多かれ少なかれそうしたセンター機能を期待されていたはずだ。編纂室が唯一のハードディスクのようにみなされると、継承の責任が集中してしまって、継承に失敗する確率は高くなる。しかし、センターが中心となって複数の継承ラインをネットワーク化するという組織デザインになっていれば、センターの機能はもっと向上するはずである。

継承学にむけて

現代日本社会がヴェズ漁民から学べることは、ささやかであるかもしれない。しかし冒頭で述べたように、文化人類学の知見を大がかりに動員すれば、ここで述べたようなアイデアを核として、継承学という社会工学を体系化できるのではないかと。似たような主張をもつ失敗学も、次第に市民権を得てきているようである。継承学は、その失敗学を包含するような体系になろう。

この分野では、文化人類学に大きな期待が寄せられる。なぜなら、文字や図像に頼らず受け継ぐということに関して、真摯なまなざしを向けてきたからである（川田 2006; オング 1991）。文字や図像を通した継承であれば、

デジタル・メディアの技術的進歩に大きく期待できる。しかし、メディアに乗らない考えかたや身体技法、特定の場所に結びついた経験などは、デジタル・メディアに任せるには心もとない。文化人類学は、けっして継承を支援してきたわけではないが、その方面で知見を活用することは重要な可能性のひとつとなろう。

国立民族学博物館の研究をみても、こうした問題への関わりを次第に深めているようだ。博物館をつうじた無形文化遺産の継承（吉田 2011）を皮切りとして、2011年の大震災後は、記憶の継承が大きく問題化されている（川島ほか 2012）。来年は、「無形文化遺産の保護に関する条約」が採択されたユネスコ第32回総会（2003年）から数えて、ちょうど10年になる。ことばやかたちに表せない経験を受け継ぐことに関して、そろそろ真剣なとり組みを始めてもよい頃であろう。

【参考文献】

- 飯田卓 1998 「ヴェズ——マダガスカル海洋民」『季刊民族学』86: 59-67。
- 2000 「インド洋のカヌー文化——マダガスカル沿岸漁民ヴェズの村から」尾本恵一・濱下武志・村井吉敬・家島彦一編『海のアジア2 モンsoon文化圏』pp.181-207 岩波書店。
- 2001 「マダガスカル南西海岸部における漁撈活動と漁家経済」『国立民族学博物館研究報告』26(1): 79-129。
- 2008 『海を生きる技術と知識の民族誌——マダガスカル漁撈社会の生態人類学』世界思想社。
- 2010 「プリコラージュ実践の共同体——マダガスカル、ヴェズ漁村におけるグローバルなフローの流用」『文化人類学』75 (1): 60-80。
- 2012 「マダガスカル船の船、造船、操船——シングル・アウトリガー式カヌーを中心にみた技術交流」飯田卓編『マダガスカル地域文化の動態』国立民族学博物館調査報告 103, pp.101-147。
- 川島秀一・北原糸子・林勲男・中牧弘允 2012 「特集 座談会 東日本大震災を考える」『月刊みんぱく』36 (2): 2-9。
- 川田順造 2006 「文化人類学とは何か」『文化人類学』71 (3): 311-346。（のちに『文化人類学とわたし』2007年 青土社 に所収）
- レヴィ＝ストロース、クロード 1976 『野生の思考』大橋保夫訳、みすず書房。
- オング、ウォルター・J 1991 『声の文化と文字の文化』桜井直文ほか訳、藤原書店。
- 吉田憲司 2011 「文化遺産と博物館」吉田憲司編『改定新版 博物館概論』pp. 209-223 放送大学教育振興会。